
A Ridiculous Thief

kei +

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A Ridiculous Thief

【NZード】

N5754H

【作者名】

kei+

【あらすじ】

あるべき「物」が無くなつて、夫婦の平穀な日常に小波が立つ。たとえそれが、どんなに些細な「物」であつても……。

ペダルがないのよ、と妻は家に戻るなり大声で言った。

僕は、彼女がすでに出かけたものだとばかり思っていたので、何か重大なトラブルにみまわれて帰ってきたのだと思い慌てた。彼女は息を切らしてなにやら尋常でない様子だつたし、口ぶりもまるで子供がさらわれたかのような大袈裟なものだったので、僕は思わずソファーから跳ね上がるよう立上がつてしまつた。その拍子に膝の上で眠つていた猫はカーペットに転げ落ち、ふざいと奇妙な声を発した。猫は動物的に危険を察知して瞬時に身を翻し、妻の足元をぬけてリビングを出て行つてしまつた。

しかし、落ち着いて考えればペダルがないというだけの話なのだ。心拍数が上がつてしまつただけ損ではないか。

「ペダルがないって、自転車の？」

僕は落ち着いてそう言った。

「そうよ、わたしの自転車のペダルがないの」

妻は肩に下げていたバッグを地面にぼとりと落とし、床に力なくへたり込んだ。彼女がそこまで動搖している姿を目に見るのは初めてだつた。だから、単にペダルが無くなつたというだけではなく、それに付随する何らかの事情があるのではないかと考えた。それで、ひとまず彼女が平静を取り戻すまで待ち、ソファーに座らせてから時間をかけて熱いコーヒーを淹れた。

「それで、ペダルが無くなつたつていうのは？」

「コーヒーに口をつけた彼女に向かつて、僕は尋ねた。

「買い物に行こうと思って、外の駐車場に行つてみたら、自転車のペダルがなかつたの。ペダルがないと自転車を動かすことはできないでしょ。それで、周りをくまなく探してみたんだけれど、見つからなくつて」

「ペダル……サドルじゃなくて？」

「そうよ、左右それぞれのペダルがないの。まるで最初からそこに存在しなかつたかのよう」

自転車のサドルが盗まれるというケースはよくあることだが、ペダルがなくなるという話はあまり聞いたことが無い。それに、僕は昨日子供とサイクリングに出かけたときまでは、しつかりペダルはあつたのだ。となれば、昨晩から今朝にかけて、誰かがペダルを奪い去つていったということになる。あるいは、跡形も無く消滅してしまつたかのどちらかだ。

以前、車のワイパーが無くなつてしまつたことがあつた。同じく、朝起きてみると無くなつていた。無くなつていたとはいっても、根元からポツキリ折られてしまつていたというだけのことだつた。おそらく、酒に酔つた誰かが悪ふざけで折つていつたのではないか。腹はたつたが、だからといって折られてしまつたものはどうしようもないし、警察に届け出るほど大それたことでもなかつたから、そのまま修理に持つていつた。

それからポリバケツのふたを持ち去られたということもあつた。こちらはまあ、ポリバケツのふたが無くて困つた誰かが盗んでいつたのだろう。

それらの出来事をよく思い返してみると、無くなつたことを発見したのは僕のほうだつた。どちらも妻に報告はしたが、今回のように彼女が動搖するようなことはなかつた。

僕は妻をリビングに残したまま駐車場に行つてみた。イプサムが一台と、大人用と子供用の自転車が一台、いつもと同じように置かれている。自転車に近寄つて確認すると、確かにペダルは両方とも無くなつていた。それも、じつくり観察すると、ペダルの破片のようなものは一切残されておらず、きれいに無くなつていた。芸術的といつてもいいほど跡形も無く消え去つてしまつた。

しかしながら、自転車に傷つけることなくペダルだけをすっぽり持ち去つていくなんて、なかなかできることではない。誰かが持ち去つたとすれば、それ相応の工具をきちんと準備して、人通りの少

ない夜中の時間帯に自転車と向かい合い、ライトで手元を照らしながら外していくたと考へるのが妥当なところだ。しかし一体何のために、そいつはペダルなんて盗んでいったのだろう。じく普通の自転車の、なんの変哲もないペダルに、いつたいどんな価値を見出したのか理解しかねる。

リビングに戻ると妻はいくぶん正氣を取り戻していた。両の頬に涙の痕が残っていた。彼女はペダルが無くなつたというだけで涙を流したのだ。客観的に考へると、その状況はとてもおかしいものだつた。それで、僕は少しだけ笑つてしまつた。それを表情に出したのがまずかった。

「なんで笑つているの？　ペダルが無くなつたことがそんなにおかしい？」

僕の表情を見咎めて、そう口を開いた妻の声は少しだけ震えていた。彼女は本気で怒つているのだ。また混乱されるとこちらも面倒なので、僕はなるべく穏やさを繕つてなだめにかかる。

「ちがうよ。ペダルが無くなつて悲しむ君の気持ちはわからないでもないし、それでどれだけショックを受けたかということも、君の姿から想像はできる」

「じゃあどうして、あなたはわたしを見て笑つたの。おかしくなかつたら笑うはずはないわ。なにがおかしかつたの。わたしがペダルぽつちで混乱したのが馬鹿らしかつたの？」

僕はその問い合わせに對して何も応えることができなかつた。まさしく僕には、ペダル程度で何をそれほど動搖しているのかというあきれた気持ちがあつた。彼女の指摘は凶星だつたのだ。しかし、ペダルくらいホームセンターで買つてきて取り付ければ済む話ではないかなにも泣いて取り乱すことはない。

しかしいくら正論を言ったところで事態は收まりそうにない。なにしろ、じきに小学校から子供も帰つてくる。子供がいきなりこの状態を見れば、僕と妻が喧嘩をした挙句に彼女を泣かせたものだと思うだろ？。仮に言葉を尽くして説明したとしても、子供にこの状

況を理解してもらえるはずがない。むしろ大人にだって不可能だ。いずれにしろ彼女には元の状態に回復してもらわなければならなかつた。

「よし、わかつた。じゃあ約束をしよう。僕は今から車でホームセンターに行って自転車用のペダルを買う。元のペダルと同じものを。そのついでにスーパーに寄つて買い物もする。帰つてきてから、僕が責任をもつて自転車を直す。しつかり元通りに、ね

「でも……」

彼女が言葉を発そうとするのをおしどごめ、僕は続ける。

「そして、君はこの件に関してなんら責任はない。君が悪かつたわけでもないし、僕の態度が君の混乱を招いたことを深く反省している。今後、一度とこのよつなことが繰り返されないように、駐車場の前に可動式の柵を設けよう。そうすれば誰かが駐車場に入つてペダルを盗んでいくなんて事は容易にできないだろう」

それで彼女はようやく落ち着きを取り戻したようだつた。

しばらくして僕たちはイプサムに乗り込み、ホームセンターでペダルを買い求め、スーパーで食材も買った。今夜はすき焼きをすることにした。子供も喜ぶし、なによりすき焼きくらい食べないと気持ちが治まらない。僕はとても疲れていた。休日だというのになんだつてこんな妙な事態に見舞われなければならないのだ。赤信号で停車し、目の前の横断歩道を次々に人が渡つていくのを眺めながら、そう愚痴りたい気になつた。

「わたし、これまで一度たりとも物をなくしたことって、なかつたのよ」

不意に助手席の妻がそう言つた。僕は油断して聞き流しそうになつたが、彼女の口ぶりからするとどうやら本気で言つてゐらしかつた。

「一度も？ 子供のときに遊んでいた玩具がどこかへいつてしまつたりとか、鉛筆や消しゴムといった文房具がなくなつたりしたことも？」

そう僕が訪ねると、ふむ、と妻は考え込んでから、

「ないわ。少なくとも無くなつたと思つて探してみたらすぐに見つかるなんてことばかりだつたから」

「つまり今回のように物を無くしたというのは初めての経験なのか、仮に物がなくなつたという経験がないとすれば、その事態に対する免疫がなかつた妻が混乱したというのも、わからない話ではない。親から手をあげられたことのない子供が先生から叩かれると、深いショックを受けるのと、似たようなものだ。問題は彼女が子供でなく立派な大人であることだ。だが、むしろ大人になるまで叩かれたことのない人間が叩かれれば、同じ条件の子供以上に深く傷つくかもしれない。そして、今まで物を無くしたことがないというのは奇跡的なめぐりあわせであり、ある意味では悲劇だつたのかも知れないのだ。そして、そのことについて彼女に責任はない。

家に帰ると、僕は約束どおりペダルを修理した。元に戻つた自転車を見せると、妻の顔はようやくほころんだ。帰つてきていた子供も母親の顔の険しさがなくなつたことで、喜んだ。なぜかはわからないが、僕もなんだか嬉しい気持ちになつた。

それから彼女はすき焼きの準備にとりかかり、僕は子供と一緒にお風呂に入つた。あがつてからビールを飲み、先に出来上がつたサラダなどをつついていた。ようやく落ち着いて家族そろつてくつろいでいると、妻が猫に餌をやり忘れたことに気づいた。朝食と夕食の際、猫に餌をやることにしているのだ。たまには高い缶詰の餌でもあげるといい、と僕は言う。

妻が猫の名前を呼んだ。いつもなら名前を呼ぶ前にリビングで待機しているのに、珍しい。妻はキャットフードの缶詰を片手に部屋を出て行く。子供は僕の隣の席に座つて、まだ食べないと訊く。もうすぐ。お母さんが猫に餌をあげたら、それから食べよう。すき焼きはカセットコンロの上でぐつぐつと煮立ち、牛肉や春菊やしらたきが揺れている。火が強いよつた気がしたので、弱火にする。つ

けっぱなしにしていたテレビから、キャットフードのCMが流れる。
そして僕は、膝から落としてリビングを出ていったきり、猫の姿
を見ていないとこ~~ぬ~~づく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5754h/>

A Ridiculous Thief

2010年10月8日15時10分発行